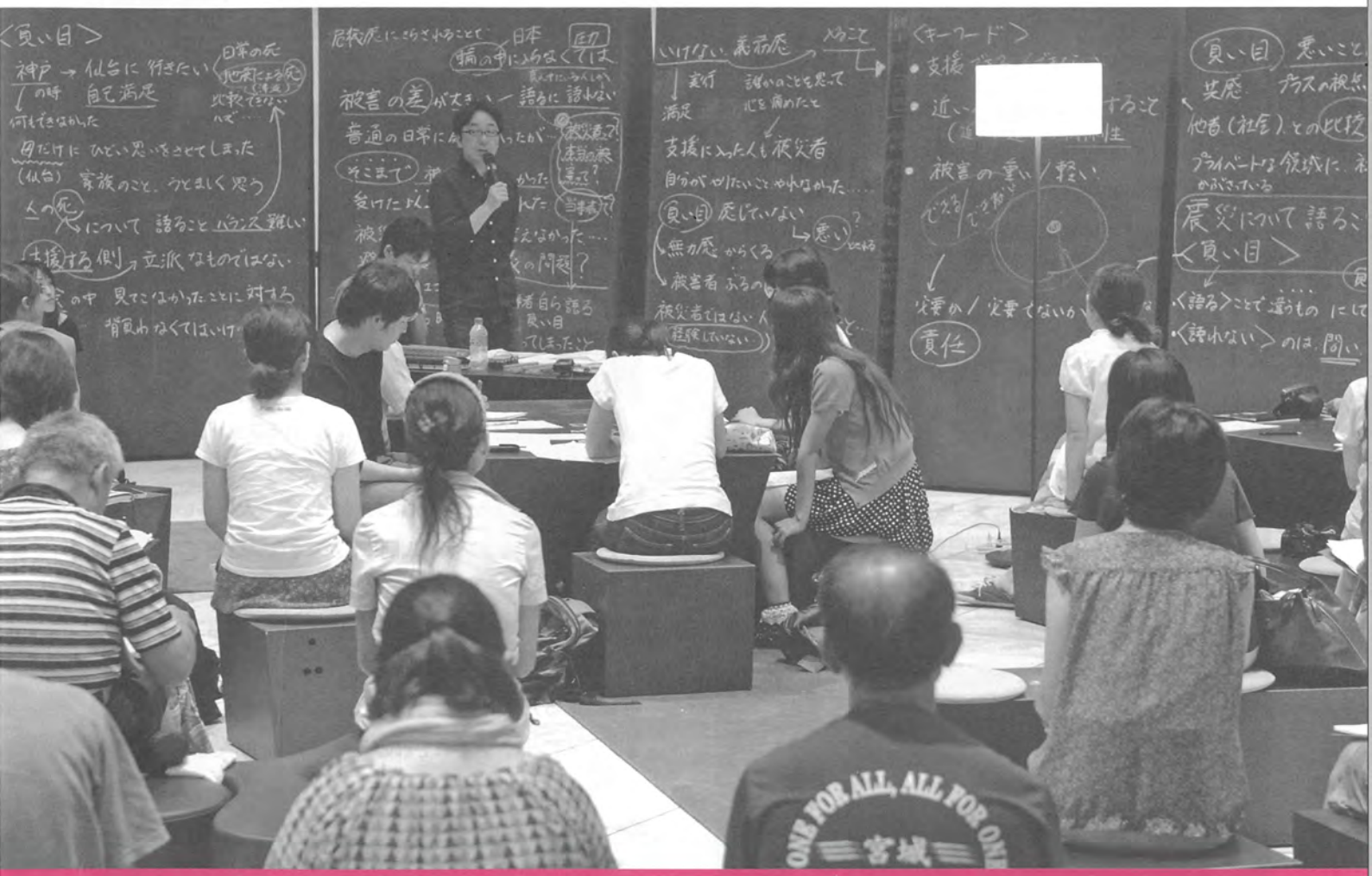


アートミーツケア学会 News+Letter

Vol.13 2015 Spring

CONTENTS

2014年度神戸大会報告「ファッション—纏う身体」
見寺貞子

学生レポート

| 臨床こばなし　「問いに寄り添う——震災とてつがくカフェ」　西村高宏、近田真美子
| アートミーツケア数珠つなぎ　清水千佳
| 2015年度大分大会のご案内

Photo:てつがくカフェ@せんだい

ファッション―纏う身体
2014年度神戸大会報告

グラフィックデザイナーの杉浦康平さん、美術家の片山真理さんの講演からはじまった、2014年度大会。Breaker Projectディレクターの雨森信さんをむかえ「自己表現の先には何がある？」と題し行ったディスカッションや、会員のみなさまによる分科会、それぞれの研究発表や実践報告、ポスター発表など充実した内容となりました。
沖縄から北海道まで、2日間でのべ130人ほどの方にご参加いただき、新たな交流の機会となりました。

レポート

「ファッション」と「身体」その行方を探る

見寺 貞子 神戸芸術工科大学教授

ファッションとは、一般的に、「ある時点において広く行われているスタイルや風習のこと。なかでも特に、人々の間で流行している服装や装い」とされ、若者文化の象徴であり、斬新で、短期間で移り変わるものと捉えられています。

しかし、本大会では、「ファッション」と「身体」から、全く異なる視点や関係、表現が生まれている様々な事例研究が発表されました。

杉浦康平氏の講演「花咲く木を身に纏う」では、「人が木になり、花になる…」。樹や花柄の布を身に纏い、自然が秘める生命力・豊穣力の耀きを人は我が身に重ね、同じ力が自らの身体に宿ることを願う。ファッションという分野から、私たちの身体は、自然との一体感を感じ、生命の持ち得る力強さや安堵感を纏っているように感じました。

片山真理氏の講演「ファッションの自由」では、両足義足である身体に、ハイヒールを履いて装う姿から、強烈な「生きている」を感じました。ファッションだからこそできる選択の自由と自己表現、彼女は、ファッションを介して、社会への自立を発信していました。

ディスカッション「自己表現の先には何がある?」では、地域や他者との関係のなかで、協働しながら生まれてくる自己表現とケア。そこには、受け身のケアではなく、自らの思

いを見つけ、自他の心を豊かにしてくれるファッションを介した意思を持つ身体が存在していました。

ファッションとケア。結びつかないと思う人が多いでしょう。しかし、ファッションは、人間にしかできない行為であり、人間らしく生きるということ、快適に生きるということにファッションは欠かせないツールなのです。そして、ファッションは、人々を快適にし、生活を豊かにするデザインの力を持ち、また、人を感動させるアートの力も持ち得る分野でもあるのです。今後、ファッションは、人それぞれの価値観のなかにさまざまな意味を持ち、その人の生涯を通して、自由にその人の存在を表現していくでしょう。より多くの人に、ファッションの可能性を試していただければと思います。

見寺 貞子（みてら・さだこ）／神戸芸術工科大学教授
1955年、大阪生まれ。2006年、神戸芸術工科大学博士後期課程修了。博士（芸術工学）。アートミーツケア学会、ファッションビジネス学会、芸術工学会、日本繊維機械学会、日本繊維製品消費科学会各会員。ユニバーサルファッション関連セミナー、産官学民プロジェクトやワークショップなど実践多数。

本大会でも、準備から当日の運営まで、学生のみなさまに多大なるご協力をいただきました。神戸芸術工科大学でファッションを学ぶ彼らの視点から捉えた2014年度大会。
５人の感想から、そこで考え、語られた、ファッション、身体、デザイン、ケア、アート・・・のありようについて振り返ります。

■ファッションを学ぶなかで、ケアという言葉はあまり出てこない。しかしそれは当たり前すぎて、見落としてしまっている点であると、学会を通じて学んだ。人は毎日、服を着る。それは、杉浦先生の講演では、生命力を宿す祈りのような行為であると感じ、片山さんの講演では、ひとりの人の生き方を支える切実な行為であると感じた。その点を改めて意識したい。そうすれば毎日がケアの現場になる。（井上裕之）

■アート・デザインは人の心を豊かにしてくれる。アート・デザインをする人も、もらう人も自分だけではなく、他人と交感できることを、この機会を通じて再度学んだ。どのようなデザインが良いデザインだろうか。と考えてみることもある。理想的には多く売れるデザインが良いと思うが、人とつながっているデザインをしたいと思った。（許孝範）

■ケアという言葉は、福祉の分野に限らない豊かさを象徴したとても大切なキーワードだと思います。この言葉はアートだけでなくデザインにも関わってくるのではないでしょうか。アートミーツケア学会では、アートやデザインには何ができるかいう問いに対する可能性について考えることができました。私は、ケアという言葉が単に治療という言葉以上の意味を持って、アートとデザインと交わることを願っています。（栗田哲希）

■自由は平等に与えられてはいない。
障害による自由の拘束を打ち破り、自身の選択により自身に自由を与えるとき、障害と肉体は自己の表現の道具となり異端の個性として光を放つ。切断、その喪失を埋めるハイヒール。叫びを肉体で代弁する処に、その異端を理解する。彼女の肉体から虚無は、感じない。むしろ建設的なのであろう。
その肉体の発露に次世代を残すであろう色欲が存在すれば、その自由は完成する。（市原正治）

■それぞれの講演・ディスカッションを聞いて感じたことは、「ファッション」を「ツール」として、社会問題・地域問題など、様々なことを人々に訴えかけているということだ。まさに、「おしゃれだけがファッションではない」のである。
「ファッション」を通すことにより、入口が柔らかくなる。それが「ファッション」の大きな力であり、これからの役割でもあると感じた。（松本彩也加）

アートミーツケア学会 2014年度総会・大会「ファッション―纏う身体」

■日程　2014年11月15日（土）、16日（日）
■会場　KIITOデザインクリエイティブセンター神戸
■主催　アートミーツケア学会
■共催　神戸芸術工科大学

■プログラム

【11月15日（土）】 大会1日目
□講演1「花咲く樹を身に纏う」 杉浦康平（グラフィックデザイナー、神戸芸術工科大学名誉教授、同大学アジアンデザイン研究所所長）
□講演2「ファッションの自由」 片山真理（美術家）
□ディスカッション「自己表現の先にはなにがある？」
見寺貞子 （神戸芸術工科大学教授）
雨森 信 （Breaker Projectディレクター／大阪市立大学特任講師）
谷口文保 （神戸芸術工科大学クラフト・美術学科准教授）
コーディネーター：中川 眞 （大阪市立大学大学院文学研究科教授）

【11月16日（日）】 大会2日目
□プレゼンテーション　□ポスターセッション
□分科会1
A 子どもによりそう身体のワークショップ
B 身体的関わりへの技術からのアプローチ
C 障害者福祉施設を起点とする共生の地域づくりを考える―アートプロジェクトから共生社会へ
□分科会2
D 創造的な身体活動をとおして『さわること』を捉え直す
E 音楽をつかいこなすコミュニケーションプラットフォームについて語り合う
F 夢のグッドアートミーツケア賞！？・・・で、評価どうする？

臨床こばなし その4

問いに寄り添う——震災とてつがくカフェ

これまで臨床こばなしでは、障害のある人との音楽をとおした関わりや、臨床での表現活動などについて話してきました。今回は、臨床における哲学について取り上げたいと思います。仙台で「てつがくカフェ@せんだい」を行う、西村高宏さん（東北文化学園大学）、近田真美子さん（東北福祉大学）のおふたりをゲストに迎え、お話を伺いました。

てつがくカフェ@せんだい

哲学とは、わたしたちが通常当たり前だと思っていること（自明なこと）からいったん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった遡行的な問いを投げかけるところからはじまります。「てつがくカフェ@せんだい」は、そのような問いを参加者どうしが共有し、「哲学的な対話」をとおして、自分自身の考えを逞しくすることの難しさや楽しさを体験してもらうことを目的とした＜対話の場＞です。

震災と「てつがくカフェ」

西村　私たちは、2010年より仙台で「てつがくカフェ」を開催してきました。2011年5月からは、せんだいメディアテークにて「考えるテーブル」と題し、東日本大震災に関連した問いについて考え続けてきています。

近田　考えるテーブルの第1回は＜震災と文学…「死者にことばをあてがう」＞というテーマで行いました。

西村　東日本大震災直後は、震災という出来事と距離をとるのが非常に難しい状況でした。そういったとき、言葉は、距離をもってその出来事を捉え直すことを可能にするように感じました。てつがくカフェを行うことで、距離を縮めたり、さらに引き離したり、そういったことが自在にできるように、また互いに互いの距離感を認め合えるようになればと思いました。

たとえば、引っ越しなどで物理的にいま完全に離れている人でも、10年後に自分の故郷について問い直すような人たちもいます。寄り添ったり離れたり。そういうゆるみがあるのがいいはずなのに、それがなかなか作れなかったので。ゆるみをゆるすような場を拵えることが必要だと思って。

問いに寄り添う

近田　考えるテーブルも、2015年で4年目を迎えます。少し変化も感じるようになりました。震災直後に感じていたような切迫感というか、問いの必要性にすごく迫られている人は、もしかしたら人数的にはすごく減ったかもしれません。でも、4年という歳月のなかで、時間をかけて改めて見えてくるものもあります。そのときどきで出てくる問いやテーマも変わってきていますし、やり続けることの意味を感じています。

西村　当時は、早く答えを、早く答えを、という人が多くいました。たとえば、メディアテークのシンポジウムに著名な方がいらっしゃったときも、参加者は「では、どうすればいいんですか？」と急いで答えをすぐに求める。お母さん鳥に、雛鳥が餌をくれというみたいな状況で、答えを運んでくれるのを待っていた。でも4年間てつがくカフェを行ってきたなかで、答えを早くくれという人は少なくなりました。

昨年から東京で2か月に1回のペースで行っている「てつがくカフェ@せんだい × とうきょう」でも感じますが、てつがくカフェの2時間では答えなんて出ないんだけど、寄り添っている感触は、参加者それぞれにあると思うんです。自分で問い続けていくこと自体に意味があって、その問いに寄り添っていけるかどうかが試されている。そういう忍耐力みたいなものが育まれてきたと感じています。

答えを出すこと、出さないこと

西村　一方で、「答えを出さないこと」の無責任さというか、そういったことも気になってきました。てつがくカフェでは、生活のなかで問わざるを得ないような問いについて、いつも考えてきました。原発の問題についても「エネルギーという＜課題＞」といったかたちで問うてきた。そういうことについて考え、対話する場をつくることじたいを目的としてきたんですね。でも最近は、ある特定の問題に対し、哲学的に問い直し、答えを導き出し、市民からの提言のようにして行政に投げかけてもいいのかなと思ってもいます。

近田　結論はどうなるかわからないですが、考え方に影響を与える可能性は大いにある。同じ問題でも、捉え方が変わったら、賛成から反対に変わる人もいると思うんです。でもだいたいの場合は、改めて問い直すこともないまま、多数決をして賛成、反対のパーセンテージで決めることになってしまう。

西村　哲学カフェで、何らかの合意を生み出すとか、メッセージを発するべきなのか。すべては問いとして可能です、というスタンスにおいておくのか。いま、私たちのなかで問題になっています。

近田　原発の問題にしても、そこにまとわりついている問いはすごくたくさんあります。それを徹底的にやり続けるという、しつこさは大事なように思います。正解は出さないけど、いっぱい考えますというのを集中的にやる。違う角度で、ひたすらいろいろ考えてみるのもひとつのあり方かな。

西村　どの辺りに、哲学の力が最も発揮できる距離があるのか、いつも考えているんです。

続けてきたなかで

西村　長いことやっていると、最初は同じことしか言わなかった人が、少しずついろんな人の意見を聞いて、意見が変わってきたことに気付く。それは嬉しいです。もちろん、変わらなくてもいい。でも、変えられるようになることは重要だと思います。変えられる素養、力、思考の柔軟性がつくと違う。

近田　一言も話さなくて、終わる直前になってぐわーっと話す人、絞り出すように出された発言に出会うと、すごく感動します。短い時間で、すごく影響を受け合っているなあと思う。そういった時間を、今後も積み重ねていきたいです。

てつがくカフェ@せんだい
http://tetsugaku.masa-mune.jp/index.html
考えるテーブル
http://table.smt.jp/
てつがくカフェ@せんだい × とうきょう
http://sendaixtokyo.jimdo.com/

西村 高宏（にしむら・たかひろ）／東北文化学園大学教授
1969年山口県生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専門は臨床哲学。＜対話＞という営みをとおして、哲学的な知の社会的接続の可能性を問い直すことが現在の主な研究テーマ。

近田 真美子（こんだ・まみこ）／東北福祉大学講師
日本赤十字広島看護大学、北海道医療大学大学院博士前期課程修了。精神科、外科、ICU病棟で働いたのち、現職。現在はACT研究に取り組む。「東日本大震災を考えるナースの会」主宰。

第1回「震災と文学『死者にことばをあてがう』ということ」（2011年6月18日）。

第21回「震災を問い続けること」（2013年5月6日）。
毎回、対話と並行して板書を行っている。

U-18「いま、私たちが問いたいこと」（2014年9月7日）。
参加者を13－18歳に限定したU-18てつがくカフェも継続して開催している。

てつがくカフェ@せんだい × とうきょう
第4回「震災を語る資格」（2014年9月13日）。

アートミーツケア
数珠つなぎ

清水千佳さんに聞きました

前号から始まった新連載「アートミーツケア数珠つなぎ」。
全国各地で活動される会員のみなさまをご紹介いたします。
今回は、仙台にて、創造表現空間「ハート＆アート空間ビーアイ」の
スタッフをされている清水千佳さん。
宮城県立こども病院で2014年4月から6月にかけて行われた展示について伺いました。

Q1 展示について、教えてください。

宮城県出身で、イタリアで活動していた彫刻家・星真子さんの作品展「HOSHI SHINKO 大理石・ブロンズ・デッサン展」を、宮城県立こども病院で2014年4月21日から6月13日まで約2か月に渡り実施しました。期間中の毎週土曜日には、木・ガラス・紙・布など素材ごとに講師を変え、ワークショップ「かけら・カケラ・KAKERA」を行い、入院中の患者・家族に参加していただきました。

Q2 その活動のきっかけは。

東日本大震災で星さんの故郷・石巻市は大きな被害を受けました。ふるさとの子どもたちにエールを贈りたい、被災三県の人たちに作品を通して夢や希望をもってもらいたいと、帰国を決心した星さんから「どこか作品展をできるところはないでしょうか」と相談されたのがきっかけです。

当初は病院で展示することは考えていませんでしたが、ギャラリー等では1～2週間の展示しかできません。星さんが長く展示できるところを探しておられたため、病院設立時に作品を寄贈したご縁があったこと、ビーアイの関口が癒しの環境コーディネーターを務めていたことから、こども病院で作品展を行う運びとなりました。ブロンズや大理石の作品は大きく、運搬設置が大がかりなこともあり、感染管理の問題から彫刻の設置を心配される医師も何人かいらっしゃいましたが、玄関や各階のエレベーターホール、待ち合いとして使われているまほうの広場等に彫刻を15点、1～4階の通路壁にデッサンを41点展示させていただきました。

Q3 活動のなかで大切にされていることは、どんなことでしょうか。

作家である星さんの思いを大事に、そして病院で過ごす時間が長い子どもたちが、ちょっとしたきっかけで楽しい時間を自分で創り出せるように……と身近な素材を用いながら、お母さんたちも取り組めるようなワークを工夫してきました。子どもに関わる大人たちも笑顔になってほしいとの願いもこめていました。病院の保育士さんやボランティアさん等が参加してくださったことは今後の新たな一歩になったのではと思います。

Q4 これまでの活動のなかで、印象に残っているエピソード／できごとはありますか。

病院のエントランスに寝そべった犬の彫刻を設置した直後、子どもたちがやってきて、上ったり下りたり、なでたり、一緒に寝そべって「大きいねえ」と目を輝かせているのを見て、ああ、星さんが望んでいたのは作品とのこんなふれあいなんだなあと実感しました。病院の先生たちも「ずっと前からここにあったみたいだね」とすっかり建物になじんだ彫刻たちを日々可愛がってくださいました。

Q5 宮城県という場所で活動を行うことについて、考えるところがあれば教えてください。

まだまだこれからの場所、なんだと思います。海の幸山の幸が手近にあり、気候条件も厳しくないせいか、情報発進力・時代とリンクする力・新しいモノを受容してそれを変容して自分のモノにしていく力、独創性、先進性などの力が弱いような気がします。どう市民を巻き込んでその気にさせるか？が課題だと感じています。

Q6 今後やりたいことや展望について教えてください。

ひそかに妄想しているのは、夕食を一人で食べているような子どもたちが、300円持ってそこに来れば誰かといっしょに温かいごはんが食べられる『こども食堂』のようなものを、たとえば週1回とか、どこかでやれないかなあということです。一緒に食べる、あるいは一緒に作る時間のなかで、先生や家族に言えないことも受け止めてあげられたら……なんて考えています。

Q7 アートミーツケア学会に対して一言！

鷲田先生の「アート見いつけやぁ学会なんだよ」の言葉が印象的で……。世の中の[学会]がどういうものかよく知らない私ですが、幅広い分野の方々の様々な活動から、たくさんの学びと刺激をいただいています。

話を聞いた人

清水 千佳（しみず・ちか）
出版社やエコショップ、子ども支援NPOの事務局長を経てハート＆アート空間ビーアイのスタッフに。人・モノ・言葉・自然との出会いを大事に、五感を磨きアートの手法を用いながら、2歳から大人まで通ってくるそれぞれが「自分になる」時間を育み続けている。

アートミーツケア
アートミーツケア学会
2015年度 大分大会のご案内

アートミーツケア学会2015年度大会は、11月7日、8日に大分で開催いたします。大分大会実行委員の田中修二さんよりメッセージをいただきました。

大分駅前

コミュニティを編み直す―つなげる力とアート

田中 修二 大分大会実行委員（大分大学教授）

いま大分の街は大きく変わろうとしています。

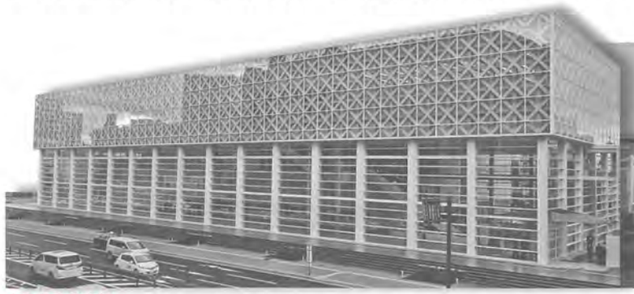
中心部の再開発により3月に駅前広場が完成し、4月には駅ビルと県立美術館がオープンします。またこの夏が3回目となる「別府現代美術フェスティバル　混浴温泉世界」や昨年の「国東半島芸術祭」など、アートを通じて地域の力を生み出そうという活動が県内各地でも展開されています。

それらは大分の長い歴史のうえに成立しているものであるともいえます。古代の国東半島を中心とする神仏習合の独特な文化。大友宗麟が活躍した16世紀中頃には西洋文化の窓口としての役割を果たし、江戸時代の南画家田能村竹田の登場は「豊後南画」の隆盛をもたらしました。

たとえば竹田の旺盛な制作活動が地域の多くの人びとによって支えられたように、そうした文化が成立するには創造的なコミュニティの存在が不可欠です。竹田は自らの思い描く理想郷を絵画に表現しましたが、その理想郷とはいまの言葉で言えばアートと福祉が融合した世界だったのでしょう。

大分県は1965年に社会福祉法人「太陽の家」が創設され、81年からは毎年「大分国際車いすマラソン」が開催されるなど、福祉の取り組みに熱心な土地です。本学もまた「福祉」を理念の一つに据えて活動を展開しています。

今回の大会は、これらの歴史的な土壌や現在の状況をふまえつつ、新たな街づくり、地域の活性化のなかでのアートと福祉のあり方を考え、発信していく機会になることを願っています。基調講演には平田オリザ氏をお招きし、「新しい広場を作る」というテーマでお話しいただきます。街なかや各地域に「広場」が生まれ、新しいコミュニティが編み出されていくための提言をぜひ多くの方々からいただければと思います。みなさまのご来訪を心よりお待ち申し上げます。



大分県立美術館

別府現代美術フェスティバル
混浴温泉世界

大分国際車いすマラソン

アートミーツケア学会 2015年総会・大会

■日程：2015年11月7日（土）、8日（日）
■会場：iichiko総合文化センター（大分市高砂町2-33）
■テーマ：コミュニティを編み直す―つなげる力とアート

プログラムの詳細やプレゼンテーションの応募方法は学会ＨＰにてご案内しております。

＊お申し込み・お問い合わせは、事務局までお願いします。

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

2. 調査研究の推進
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3. 学会誌の発行
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4. ニュースレターの発行
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5. フォーラム、シンポジウムの開催
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7. 国際交流の推進
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先　アートミーツケア学会
口座番号　00920-4-252135

2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。

3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般 10,000 円　学生 5,000 円
□賛助会員　30,000 円

役　員（敬称略）

□会長　鷲田清一（京都市立芸術大学理事長・学長、せんだいメディアテーク館長）
□副会長　中川　真（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
副会長　森口ゆたか（美術家、NPO 法人アーツプロジェクト代表）
□常務理事　播磨靖夫（一般財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事　秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事　坂倉杏介（東京都市大学都市生活学部准教授、三田の家 LLP 代表）
理事　杉林英彦（愛知教育大学准教授）
理事　鈴木理恵子（女子美術大学准教授）
理事　関口怜子（ハート＆アート空間ビーアイ代表）
理事　ダーリング・ブルース（美術史家）
理事　高橋伸行（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
理事　銅金裕司（メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授）
理事　並河恵美子（認定 NPO 法人芸術資源開発機構代表理事）
理事　野津　亮（大阪府立大学大学院工学研究科准教授）
理事　日野陽子（京都教育大学准教授）
理事　本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／文学研究科准教授）
理事　水野哲雄（京都造形芸術大学名誉教授）
理事　見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
理事　三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
理事　山口悦子（大阪市立大学医学部附属病院安全管理対策室専任医師）
理事　横川善正（金沢美術工芸大学名誉教授）
□監事　柊　伸江（株式会社ダブディビ・デザイン代表取締役）
監事　田中みわ子（東日本国際大学准教授）

アートミーツケア学会 オンラインジャーナル　第7号　投稿案内

会員のみなさまから、論文、研究ノート、実践報告等などの投稿を募集いたします。

■締切：2015 年 8 月 31 日（月）必着

詳しくはアートミーツケア学会ウェブサイトをご参照ください。

■ 2016 年 3 月発行予定

編集後記

●2014 年 11 月に実施した総会・大会。遅ればせながら、ニュースレターにてご報告できました。各プログラムの内容充実に加え、各地の会員のみなさまの交流の場として育ってきたことを、本当にうれしく思っています。また、3 月にはオンラインジャーナル第 6 号を発行いたしました。ぜひご高覧ください。
（井尻貴子）

●今年は大分での開催です。今号の大分大学の田中先生のご紹介にあるように、大分は「混浴温泉世界」や「国東半島芸術祭」など、地域をいかしたコミュニティアートプロジェクトがさかんな地域であり、一方で地域での福祉も熱心な取り組みがはじまっています。別府の温泉と合わせてぜひ訪問したいと思います。
（森下静香）

アートミーツケア学会
ニュースレター
Vol.13　2015 年 5 月 1 日発行
発行　アートミーツケア学会
http://popo.or.jp/artmeetscare/
〒 630-8044 奈良市六条西 3-25-4
一般財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501
E-mail.art-care@popo.or.jp